こどもどらごん

秋野こずゑ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こどもどらごん

【Ｎコード】
Ｎ２８５４Ｌ

【作者名】
秋野こずゑ

【あらすじ】
不幸の星のもとに生まれた男、ハトリ。ある日砂漠で拾った迷子のせいで、やっぱり不幸に見舞われるはめに。二人の迷子の物語。最終的には偽親子から年の差恋愛に転ぶ…かもしれない。

序章

覚醒は突然だった。

漆黒の空に浮かぶ白い月と、それをとりまく金の星々。そして、どこまでもどこまでも続く冷たい銀色の砂。それが彼の瞳に映る世界の全てだった。

横たえられた体を持ち上げる。立ちあがろうと力を入れると、左足に鋭い痛みが走った。覚えのある感覚に、少年は自分の足の骨が折れていることを悟る。なぜそのような事態になったのかは覚えがなかった。というよりも、自分がいったいどこにいるのかさえ分からない。

ただ、肌に感じる砂の冷たさが心地よい。まぶたが重い。自分がとても疲れているのを自覚する。何も考えたくない。そうして彼はふたたび体を投げ出して、思考をじょじょに放棄した。

そのとき世界は彼を受け入れた。

砂漠の迷子1

デゴン砂漠の砂は、凍てつくような銀色である。そのむかし、スーヤ神が放った炎によって、この地の生きとし生ける全てのものが燃え尽き、銀色の灰になった。その灰がつもって出来たのがデゴン砂漠なのだ。というのが、デゴンの民の間に伝わる物語である。「良い子にしていないとデゴンの砂になってしまうぞ」とは、この地の母親が幼子を叱るときの常套句だ。そのため子どもたちは砂への恐怖を覚えて育つ。

実際のところ、デゴンの砂はどう見ても岩石が風化して出来た砂粒であるから、もちろん成長とともに伝説はただのおとぎ話であることに気づいていく。しかし、いくつになっても砂漠への警戒心は決して消え去ることはない。砂漠の民として生きていくために、それはとても重要なことだからである。

しかし、それでもなおこの銀砂の海は美しいとハトリは思う。彼は、職業柄さまざまな土地を日々訪れているが、デゴンは彼の最も好む風景の一つである。たとえ移動するのが難儀であろうと、全身が砂ぼこりにまみれようと、デゴンを走るときはつい鼻歌まじりになってしまうほどである。

「月のー砂漠をー、はあるーばーるとーう」

調子っぱずれな音を高らかに響かせながら、彼は気持ちよくバイクを滑らせた。

ハトリの仕事は郵便屋である。とはいえ彼が請け負うのは、とにかく遠方への手紙に限定される。どんな僻地―たとえば山の頂上や絶海の孤島―であっても、必ず迅速にお届けします、というのが彼の郵便配達のプロとしての信条である。

しかし、それとは逆に隣近所への配達などは断固として受け付けない。そんなもん自分の足で届けやがれというのが彼の考えである。

ちなみに彼は客に対してもこのように答えるため、郵便屋としての評判はすこぶる悪い。
そんな偏食気味な仕事の選び方では稼ぎも微々たるものであるが、彼は金銭には執着しない性質なので生きる分にはまあなんとかなっている（というよりも生きるのに必要なだけの仕事しかしないと言った方が正しいかもしれない）。長距離の配達を進んで引き受けるモノ好きは珍しいので、仕事に困ることもなく、ハトリは悠々自適に日々を過ごしていた。

「旅のーらくだは……あ？」
次の街まではまだ距離があるので、いつもなら視界は青い空と銀の砂漠の二色のコントラストに占められている。ところが、今日は眼前に広がる風景にどこかしら違和感を覚えた。ハトリは目を凝らして前方に注意した。
初めは一点の黒だった。それは近づくにつれて何かの布切れのように見えた。さらに距離が縮まると、だんだん動物か何かの死骸のように感じられた。
ハトリは嫌な気持ちでその塊を見つめた。
「まさか、人じゃないよな…」
そう呟いたが、内心ではその可能性が高いことを理解していた。この美しい砂漠は旅人にとっては、時として残忍な魔物となりうる。今までに何度も砂漠で行き倒れた人間を見てきた。時にそれはすでに朽ちた屍となり果てており、また時に彼の手で命をつないだ者もいた。
ハトリは祈るような気持ちでバイクのアクセルを強めた。

砂漠の迷子１（後書き）

中途半端ですみません。続きます。

砂漠の迷子2

銀の中にぽつんと落ちた黒い塊が小さな子どもであると視認できる距離まで近づいたとき、ハトリはバイクを下りてゴーグルを外しながら周囲を見回した。

裸眼で確認できる範囲に、足跡やそのほかの形跡が全くない。今日はこの地域には珍しく朝から風が吹いていなかった。つまり、この子どもがここにたどり着いたのは少なくとも晩のうちだ。デゴン砂漠は昼でもそれほど気温が上がらず、夜にいたっては冷え込みがとても厳しい。特に防寒着を装備しているようにも見えない、ただの幼子に耐えられるものでは決してなかった。

憂鬱な気持ちでそばまで歩み寄ると、右手の手袋をはずして子どもの顔に触れた。その砂にまみれて乾いた肌は悲しいほどに冷え切っており、命のあたたかみを微塵も感じなかった。年の頃は7、8才前後だろうか。肩ほどまでの黒髪はやはり砂にまみれて艶を失っているが、色白で幼いながら整った顔立ちをしている。性別はわからないけれど、男であれ女であれ、成長したらそれなりに美しくなっていただろうと思わせた。着衣はここより東に位置するハンザ王国のものに似ている気がする。なんにせよ、このあたりの人間ではないに違いない。荷物も何も見当たらないことから、何者かに置き去りにされた可能性が高い。

ハトリは少しの間だけその無垢な顔を見つめていたが、一息つくとあらためて呼吸や心臓の動きを確認した。分かってはいたが、その行為は結果として彼の心をさらに重くしたに過ぎなかった。しかし、いまだ腐敗が全く見られないので、死後それほど経過していないのだろう。そう思うと一層のやるせなさに襲われた。

その感情がひどく自分勝手なものであることは、頭では理解していた。もう少し早く見つけていたら、と考えること自体が単なる傲慢である。死は特別なものでもなんでもない。命あるものにとって

は当たり前の瞬間である。彼とて、今までに数え切れないほど生き物の死を目の当たりにしてきた。その中には、肉親や親しい友人もいた。それでもなお、たとえ赤の他人であろうと、死に直面した時にはこうして感傷にひたってしまう。それは、自分がまたしても取り残されたという気持ちが心の片隅にあるからかもしれないと、彼は思っている。

ハトリは黒く渦をまく思考を断ち切るように頭をふった。口元に巻いていた布をほどいてから、もう一度、子どもの頬に手を当てる。今度は両手で頬をはさむ。

「おまえがハンザの人間かどうかは分からないけれど、とりあえずこれで許してくれ」

そう呟いて、ゆっくりと白い額にくちづけた。それは、ハンザ王国における伝統的な死者への別れの挨拶であった。

そうしてから、緩慢な動きで顔を離す。

「それじゃあな」

立ちあがるために手を離そうとしたとき、ハトリはおのれの両手に違和感を覚えた。なんだか先ほどよりも手のひらが温かい気がする。まるで触れている部分から熱を与えられているかのように。

次の瞬間、ハトリは固まった。

長いまつげを震わせて、子どもの瞳がゆっくりと開いたのだ。ガラス玉のように透き通った青い眼が、うつろに天を見上げる。そうしてさらにゆっくりとした動きで、眼球が何かを探すようにさまよったかと思うと、彼をとらえてぴたりと止まった。その間、ハトリは息をのんで子どもを見つめたまま動けなかった。子どももまた彼を見つめたまま、しばらく微動だにしなかった。そのガラスのようにピカピカ光る瞳からは何の感情も読み取れない。

それからようやく子どもの干からびた唇が動いた。小さくかすれた声がハトリの耳に響いた。

「ひ、げ…」

たったそれだけの言葉をつむぐと、子どもは再び目を閉じた。今度はかすかだが、すーすーという寝息が聞こえてくる。

後に残されたハトリは茫然自失の状態から立ち直れないまま、しかし無意識に手をあごにやった。ほどよく伸ばされた彼のあご髭は、やはりデゴンの銀砂のせいでパサパサとしていた。

片鱗

聞き間違いでなければ、今この子どもはたしかに「ひ、げ…」とつぶやいた。

さっきまでは死んでいたはずだ。それは確認したハトリが一番理解している。なのに、なぜ目を開けて、あまつさえ言葉まで発することができるのか。

――というか第一声が「ひげ」とはどういうことだ。俺のひげに何か文句があるのか。もしかして、くちづけた時にひげが当たって痛かったのか。それなら申し訳ないことをした。しかし、よく考えれば「ひげ」が「髭」を意味するとは限らないではないか。もしや「卑下」。または「ひいっ」とか「げっ」とかあまり良くない感動の独立語かもしれない。目覚めて早々にひげ面の男を見て「ひいっ！げげえー」、こんなところか。うん、それはちょっと悲しいな。

自分でも、上手く頭が回っていないのが分かる。ハトリはそれでも渾身の力で「ひげ」発言を頭の隅においやった。目の前に横たわっている幼子を見つめる。さきほどまでは冷たい死体でしかなかった。しかし、今は安らかな寝息をたてており、頬にも赤味が戻ってきている。

その生命の証を目にした瞬間、彼の思考はいっきに切り替わった。今やるべきことは一つ。この子どもを安全な場所まで運ばなくてはならない。様子を見る限り本当にただ眠っているだけのようだ。呼吸は規則的で、表情も穏やかである。しかし、いつからここにいたのか分からないし、さきほどの仮死状態（と表現するしかない）はやはり無視できない。何より当たり前だが、生きた子どもを砂漠の真ん中に置き去りにするわけにはいかない。

ハトリはぐてんと砂の上に投げ出された小さな体を軽くゆすった。

「おい、大丈夫か。返事をしてくれ」

しかし、ぴったりと閉じられたまぶたは動く気配がない。ハトリ

はため息をつくと、腕を子どもの脇の下と膝の裏に回した。抱きかかえようと力を込めた瞬間、子どもが小さく呻いた。あわてて顔を見ると、苦痛に耐えるように眉根を寄せていた。先ほどまで見られなった表情だ。――もしかして、どこかを怪我しているのか。短い逡巡ののち、スボンの裾を大きくまくった。

そこから現れた細い脚を目にした瞬間、彼は顔をしかめた。子どもの左脚のすねが腫れあがり、紫色に変色していた。この腫れ方ではおそらく骨に異常をきたしている。内出血の範囲も広い。急いで自分の荷物の中を探るが、応急処置に使えそうなものは入っていなかった。この時ばかりは、自分の怪我とは無縁の頑丈な体が恨めしい。

「要は、なんでもいいから固定できればいいんだ…」

自分を鼓舞するように呟いて、再び荷物の中身を物色する。年季の入った大きな革の布袋は、彼の生活用品を放り込むためのものだ。彼はその中から黒い毛布をとりだした。軽くて丈夫な黒メム羊の毛で織られたそれは、保温力と通気性を兼ね備えた旅人の必需品だ。ハトリはそれを畳んで十分な厚さにすると、子どものすねから膝上までにかけて巻きつけた。その上から適当な紐で縛って固定する。不格好だが無いよりはましだろう。この間も子どもは全く目を覚まさなかった。泣かれても困るが、あまりに無反応でも心配になる。

あらかたの処置を終えて、ハトリは自分が乗ってきたバイクに目をやった。

彼の愛車は、時代遅れの初期型自動二輪。初期型の特徴は、とにかく車体が大きく、各部にやたらとパイプやらコードがくっついていることである。人々は今やこのタイプのバイクを、親愛の念をこめて“頑固おやじ”と呼ぶ。見た目が強面なのと、故障が多くて融通がきかないことが、ネーミングの由来と思われる。そんな開発からとうに二十年が経過した旧式のバイクに乗り続けるのは、ひとえに彼が物持ちの良い人間だからである。彼の父は質素倹約を愛した

人であったから、息子にも当然それを強要した。その結果、彼は粘着質なまでに一つの物を使い続ける人間へと成長した。故障が多いなら、直せばよい。彼は自分のこだわりのためには努力を惜しまない性質なので、自動二輪の購入と同時にその整備技術を習得した。さらに、時代の流れとともに新型が登場するようになると、今度は自らの手で愛車に改良を加え始めた。そして度重なる改造の末に、ハトリの“頑固おやじ”は最新型にも負けないパワーとスピードを手に入れた。

一番近い集落まで約十キロ、しかし確実に医師の診療を受けさせようと思えばさらに二十キロ先の街まで移動した方がよいだろう。彼のバイクであれば半時間もあれば到達できる距離である。意識のない怪我人を乗せるにはひたすら不向きな乗り物ではあるが、背に腹は代えられない。少々我慢してもらおう。

まず、子どもを自分の体と後部にくくりつけた荷物で挟み込むようにした。その上で子どもの腕を自分の腹の目まで回して手を縛る。それぞれの間は隙間なく密着しているので、気をつけて走れば落ちることはないだろう。結果として誘拐犯と子どものような構図が出来上がってしまい、少しばかり気が滅入ったが、何はともあれようやく出発できる。

しかし、彼がエンジンをかけた瞬間。

ぼごんっ――長年にわたりハトリの旅を支えてきた彼の愛車は、唐突に妙な爆音を轟かせて黒煙を吐きだした。

「……は？」

彼は、子どものころから自他ともに認めるほど運が悪かった。上から物が落ちてこようものなら必ず当たる。落とし穴には百発百中でひっかかる。友達と分け合った菓子を食べれば、一人だけ腐ったものが当たる。最初は、運が悪いというよりは単純に注意力が足りないせいだと思われていた。それを危惧した祖父と父は、彼に幼少のころより武術をたたきこんだ。そのおかげで危機回避能力は飛躍

的に向上したが、いざという時に不運な目に遭うところは依然として変わらなかった。
そんな彼の運のなさが、今回も遺憾なく発揮されてしまった。
前述したように、ハトリはたいていのバイクの故障は自分で修理できるだけの知識と技術を持っている。しかし、先ほどのような爆音は今まで聞いたことがなかった。急いで車体を確認した彼の目に映ったのは、黒こげになった燃料タンクと、そこからはみ出た細長い虫の死骸だった。――やられた。ハトリは何が起こったかを悟った。
通常この手の自動二輪の燃料となるのは、炎目石（ほのめいし）と呼ばれる鉱物である。この石からエネルギーを取り出す装置が開発されたのが約四十年前。以後、豊富に採れる炎目石はさまざまな機械の動力源として重宝されてきた。しかし、このエネルギー転換装置はいまだ不安定さを残しており、微量であっても異物が混入すると途端に調子が悪くなる。そのため燃料補充には細心の注意を払い、補充時以外は必ず専用の蓋で容器をきっちりと密閉しなければならない。当然ながら、ハトリは常にそれを守ってきた。だが、今回起こったのはまさにその異物混入である。入り込んだのは、デゴン砂漠にしか生息しない「影虫」という虫の一種であった。この虫の特徴は、影のように己の体を際限なく薄くできることである。ゆえにどのような場所にも潜り込むことが可能であり、機械類の天敵とも言える存在である。しかし、多くの人々は影虫に対してそれほど脅威を感じてはいない。それは、影虫の生息地がデゴン砂漠という狭い地域に限られ、しかも個体数が極めて少ないからだ。すなわち、影虫に遭遇する確率は非常に低く、よほど運が悪くなければ被害を受けないということだ。
「運が悪いとは思っていたが、ついに影虫にまで遭遇してしまった…」
これまでにも様々な希少生物に遭遇してきた（そして概ね不幸な

目に遭った）が、またしても、である。しかもこのタイミングで。ちなみに彼の知る限り、影虫が最後に目撃されたのは七年前だ。

もはやこの子どもは赤の他人でなく、自分の不幸に巻き込まれた被害者である。なんとしても助けてやらねばならない。ハトリは心に誓った。

片鱗（後書き）

展開が遅くてじれじれ。早く先に進みたいのですが…。

目覚め

目を開けたとき最初に飛び込んできたのは、黄ばんだ天井だった。
ここはどこだろう。目だけを動かして周囲を観察する。するとすぐそばに髭面の男がいるのに気づいた。男はこちらを見つめているようだ。そういえば前にも、この黒い髭を見たような気がする。それは男の顔の半分を隠してしまうほど伸ばされていた。なんとなく触りたくなる髭だ。
「ひげ、ふさふさ…」
思わず言葉にしていたが、彼女は聞こえてきた自分の声に驚いた。
――まるで死にかけの猫みたいなガラガラ声だわ。
「…だから、なんで第一声が『ひげ』なんだ」
男は顔をしかめて呟いたが、すぐに心配そうな表情を浮かべて顔を覗き込んできた。
「体の調子はどんな感じだ？　痛かったり辛いことがあったらすぐに言えよ」
そう言われてやっと自分の体を意識した。なんだか全身が泥の中につかっているみたいに重くて力が入らない。それから左足に違和感を覚えた。まるで心臓が左足に移動したみたいに、ズキズキと脈打っている。感じたままに「あし、へん。痛いみたい」と訴えると、男は「折れているからな」と答えた。それから彼女の上半身を起こして銀色のカップを手に持たせた。中にはとろりとした茶色の液体が入っている。
「飲めるだけ飲んでみろ。無理はしなくてもいいぞ」
あまり美味しそうには見えなかったが言われるままに液体を口に含むと、ほんのりと甘くて飲みやすかった。のどが渇いていたので夢中ですすっていると、いつの間にか全て飲み干してしまった。もっと飲みたくて男の顔を見つめたが、彼はカップの中身が空になったのに見てそれを取り上げてしまった。不満げな視線に気づいたのか

男が言った。
「今のは薬湯だから何杯も飲むものではないんだ。それにいきなりたくさん飲んだら胃がびっくりしてしまう。おまえは三日も眠っていたんだから」
三日。
どうやら自分はとんでもなく寝坊してしまったようだ。だが、そもそもどうして見知らぬ場所で見知らぬ人間に介抱されているのかが分からなかった。自分の身に何が起こったのか、彼女は記憶をたどろうとした。が、考え始めた途端に今度は猛烈な睡魔に襲われた。
「ねむいわ…」
「じゃあ眠れ。ゆっくりな」
そう言いながら男が微笑んだ。あまりに眠たくてもう瞼が持ち上がらなかったけれど、そんな気がした。
――うん、そうする。
返事は声になることなく、彼女の中に溶けていった。

ハトリはじっと眠る少女の顔を見つめていたが、ふと顔を上げて入口のところに立つ人影に声をかけた。
「ジル、こそこそ覗いていないで入ってくればいいだろう。なんでそんな所に突っ立ってるんだ」
「あ、やっぱり気づいてたの。なんかハトリ伯父がお父さんみたいだなあと思って和んでた」
ジルと呼ばれた若い女は切れ長の瞳をにやりと細めた。
「なんだ、その顔は。お前が赤ん坊のときには俺がおしめを替えてやったこともあったんだぞ」
「そんな昔のこと覚えてない。私もう今年で二十五なんだから、いい加減その類の話はやめて。懐古主義のオヤジは倦厭されるわよ。そんなだからハトリ伯父は結婚できないんでしょ。わかってる、老いた自分を認めたくないから過去の栄光にすがるのよね。かわいそう。父さんも最近はやたら昔話をしたがるわ。どうせ半分くらいは

妄想でしょうけど。中年の悲しい性ってやつよね」
彼女は冷たい表情で一息にそう言いきった。
――い、以前にもまして毒舌に磨きがかかっている…。
ハトリは思わぬ猛攻にたじろいだ。そういえば、彼女はこういう性格だった。三日前、十年ぶりに彼女と再会した時には落ち着いた大人の女性になったものだと感心していたのだが、人間そうそう変るものではないらしい。それどころか、どうやら嫌な方向に才能を伸ばしてしまったようだ。しかし、自分の言葉に傷ついているハトリのことは全く意に介さず、ジルは眠る少女に歩み寄った。
「もう大丈夫そうね。長いこと目を覚まさないから心配したけど」
「ああ、そうみたいだ。おまえがいてくれて助かったよ」
「ん、別にお礼は言わなくていいよ。私の仕事だもの。それにこの子はなかなか興味深いし、伯父さんの憔悴しきった顔も見れて楽しかったわ」
からからと笑うジルを見て、ハトリは深いため息をついた。

不幸にして砂漠の中で唯一の移動手段を失ったハトリに残された道は一つしかなかった。
子どもを背におぶって歩こう。彼はすぐさま決断した。その際、万一のことを考えて最低限必要な物は持っていくことにしたが、壊れたバイクは置いていくほか無かった。二十年あまり共に旅をしてきた愛機を見捨てていくのはしのびなかったが、背に腹は代えられない。一番近い村までは徒歩で三時間弱だが、子どもを背負っての行程なので余分に時間がかかると見た方がよい。体力には自信があるが、いかんせん自分は絶望的に運が悪い。道中で何か起こるかもしれないと覚悟した方が、実際に何か起こった時に精神的な痛みが少ないだろう。
果たして、彼の予想は見事に的中することとなる。

歩き始めて二時間ほど経過した頃、ハトリは砂漠の中央部分をようやく抜け、少しばかりの草が生えた岩石地帯へとたどりついていた。もともとデゴン砂漠は局地的に発生した乾燥地域であり、その範囲はそれほど広くはない。しかも、ハトリが子どもを見つけたのは砂漠の中でもやや中心から外れた場所だったので、それほど時間をかけずに砂漠を出ることが出来た。ここも荒地には違いないが、砂漠と比べて歩きやすさの点で格段に楽になる。目的地としている村には1時間以内にたどりつけるだろう。いまだ子どもが目を覚ます気配は見られないが、ハトリは少しだけ気分が明るくなった。

しかし、勢いよく踏み出された彼の足が地面を踏むことはなかった。

体が傾いだかと思うと、次の瞬間には軽い浮遊感とともに体が落下する。このような感覚には嫌になるほど覚えがあった。昔よく味わったのだから。

これは「落とし穴」だ。

彼は長年の経験から冷静に判断し、瞬時に着地態勢をとった。しかし、一つだけ予想外だったのは、今回の落とし穴が今まで彼を陥れてきたどの穴よりも深かったことである。おそらく深さにして五メートルほど。着地と同時に足にものすごい衝撃が来た。それでも足の裏を地につけて立っていたのは彼の根性のなせる技であろう。

「ぐあ――」

ただし、どう考えても足首と膝の痛みは尋常ではなかった。

目覚め（後書き）

最近ちょっとした高さからでも飛び降りると膝がすごく痛いです。

苦い思い出

彼の着地姿勢には一筋の乱れも見られなかった。

全身の筋肉を余すところなく活用し、また生来の身体能力の高さによって、ハトリは落下の衝撃に耐えて直立の姿勢を保ったのだ。それはもちろん背中にかかえた今だ眠り続ける幼い子どもの安全のためであった。ただでさえ足に怪我をしている子どもの体をこれ以上痛めつけるわけにはいかない。それゆえにハトリは衝撃を和らげるために自らの体勢をむやみに変えることはせず、結果として落下による衝撃の負荷は全て彼の下半身が引き受けることになった。

倒れることはなかったものの、着地の衝撃が去った後にやってきた凄まじい痛みを自覚するとともに地面にがくりと膝をついた。しかし、ついた膝がこれまた痛い。一通り悶えてから、まずは子どもを地面に下ろし、自分もなんとか腰をおろして一番楽な姿勢をとった。狭い穴の中では足を伸ばすことはできないが、それでも立っているよりは幾分ましである。

「痛い…」

ハトリは誰に言うともなく呟いた。少し動かしただけでも激痛が走る。おそらく骨の何本かは折れているだろう。骨折は初めてではないが、何度経験しても痛いものは痛い。ハトリは骨折が苦手であった。もちろん怪我を好む人間はいないだろうが、切り傷や打撲などに比べると、骨折は格段に嫌なのだ。じっとしていても襲ってくる何ともいえない不快な苦痛、動かせば全身に轟くような激しい衝撃。それと何より他の怪我に比べて治るのに時間がかかるところが面倒だ。今も痛みのために冷や汗が止まらないし、頭の中では「痛い痛い痛い痛い」と唱え続けている自分がいる。自分でもいい年をして情けないとは思うものの、こればかりは体の素直な反応なのだから仕方がないと諦めてもいる。

不幸中の幸いか努力のたまものと言うべきか、子どもには傷一つ

ついていない。それを確認して安堵のため息をついてから頭上を見上げた。ぽっかりと空いた穴は小さく、地上の光がずいぶん遠くに感じられた。思っていた以上に深さがある。とはいえ穴内部の壁はしっかりとしていて穴の幅も狭いので、両足を開いて踏ん張りながらにじり上がれば子どもを抱えたままでも脱出できそうだった。普通の人間ならば厳しいかもしれないが、その点ハトリは運の悪さを差し引いて余るほどに体に恵まれていると言えた。そもそも打ちどころが悪ければ落ちた時点で死んでいるかもしれないし、万一助かったとして上まで登りきるのは困難であろう。自分とて足が動かなければ話にならないが。

そう考えた時、彼は先ほどまで自分を苦しめていた痛みが消えていることに気がついた。ひょいと立ちあがると、やはり異常は感じられない。どうやら骨の再生が終わったようだ。

「ふむ、前より時間がかかったかな。最近あまりいい食事をとってなかったから栄養が足りなかったかもしれん…」

やはり誰に言うともなく、確かめるように口にしてみる。穴に落ちてから五分ほどが経過していた。この回復時間には少々不満だ。

（まあいいか。こういう時は素直に自分の体に感謝しよう）

普通でない自分の体に感謝することは滅多にないのだから。

地上に出る頃には、さすがに息が上がっていた。それでも多少無駄な時間を過ごしたものの、大きな損害はなかったのでよしとする。自分の体はある意味ひじょうに頑丈なので怪我自体はあまり気にならないのだ。それよりも彼にとっては、まんまと穴にはまってしまったことの方が情けなかった。

実のところ、彼が落ちたのは間違いなく「落とし穴」という名の罠の一種であった。穴に落ちる直前の記憶では、そこにはたしかに地面が存在していた。それが彼の足が乗った瞬間に土が崩れ落ちたのだ。見た目には異常はなかったのに、まるで水のように土が下へと流れ落ちていった。このあたりは雨が少なく日射しが強いので、

その土壌は乾燥していて固まっている。それなのに彼が足の裏に感じたのは砂漠の砂のように柔らかな感触であった。見た目はそのままに土壌の性質を変化させてしまうというというのにピンときた。おそらくこの穴を造ったのは、「グノー」という名前の大きなトカゲに似た動物である。グノーは肉食だが動きが非常に遅いため、餌の捕獲には罠を用いる。グノーの出す唾液には特殊な効果があった。それを浴びたものは極端に脆くなるのである。ただしその物の見た目は全く変わらない。この唾液を利用して落とし穴を造るのである。そしてそこに引っかかった獲物が弱りきった頃合いを見計らってゆっくりと食べにくる。このように、罠自体はひじょうに厄介な代物なのだが、何せ動作がゆっくりなので一つの穴を造るのに時間がかかる。また人間の場合は、複数人で行動していれば誰かが落ちても他の者が助けられるので、グノーの穴で死に至るということは実はそれほど多くなかった。

ちなみにこのグノーであるが、その肉がひじょうに美味であることが分かってからは人間による乱獲が進み、ついには五十年ほど前に絶滅してしまった。ハトリはたまたま長い間誰も踏まなかったために残ってしまったグノーの穴に見事にひっかかってしまったという訳である。また穴の大きさを鑑みるにバイクに乗っていれば落ちることは無かったであろう。偶然に偶然が重なった不幸な事故としか言いようがない。このような良くない偶然には慣れているため、一つ一つを見れば彼にとってはさして重大な事件ではないが、今日のようにそれが立て続けに起こることは珍しかった。どうもこの子どもを拾ってから調子が悪いと思わずにはいられない。もっとも、そんな気持ちも心底安心しきった顔で眠る子どもを見るとすっかり忘れてしまうのだが。

サンガル村にたどり着いたのは日が暮れる前であった。サンガルは地下水脈の上に人が集まって形成された集落である。周りは荒れ野なので、村人は牧畜を行いながら基本的には自給自足で暮らして

いる。かつてグノー肉が流行した際には狩猟の基地として栄えたこともあったが、それもグノーの絶滅とともに終焉を迎え、今では寂れた小さな村でしかない。そんなところに病院があるはずもなく、村人は月に一度往診にやってくる医者に診てもらうほかは、具合が悪くなれば自力で街へ出ていくしかなかった。この村でジルに出会えたことは本当に幸運だったと改めて思う。

ジルはこの村の人間ではない。もともと彼女はここより十キロほど北にあるウルガルという村の出身だ。ちなみに「ガル」というのはこの地方の方言で「家族」を意味する言葉であり、名前の一部に「ガル」のつく村は数多く存在する。ウルガル村はサンガル村よりも豊かな土地にあるが辺鄙なのに変わりはなく、やはり村人全員が親戚のような小さな村である。ハトリもまたかつてはウルガルに住んでいたが、ジルが生まれる前に村を出ており、今では年に一度か二度訪れる程度だった。そのためジルと過ごした時間は長くないが、それでも伯父と慕ってくれる少女をハトリは可愛く思っていた。

だから九年前にジルが家出をしたと彼女の父親から聞いたときには驚いた。たしかに幼い頃から才気にあふれた彼女は、周囲からも小さな村におさまるような人間には思えないともっぱらの評判であった。土地柄のせいかなんとなくおっとりした人間が多いウルガルの中では、彼女の攻撃的な性格が際立っていたというのもある。田舎の人間の目には、ジルのような鋭い弁舌をいかんなく揮いまくる人間は都会的に映ったのかもしれない。それでも彼女は何がかんだ言いつつ自分の村を愛していたとハトリは思っていたので、父親と喧嘩して飛び出していってしまったというのは少しばかり寂しかった。

最後にジルに会ったのは彼女が十五歳のときだった。大柄な父親に似てぐんぐん成長した彼女は、当時すでにハトリと同じくらいの背丈であった。

「伯父さんさ、昔自分の身長を追い抜いたら十万メルクくれるって約束したよね」

かつての軽い口約束をしっかり記憶していたジルは、ハトリに執拗に現金を要求してきた。十万メルクといえば馬一頭が買えるだけの大金であり、ハトリとしては冗談のつもりだった。たしかに自分の身長はこの国の平均的な男性よりやや劣るが、約束をしたのはジルが三歳のときである。まさか覚えているとは思わなかった。ハトリがつつましやかな生活を送っているのはひとえにそれが彼の趣味だからであり、その気になれば金銭に困ることはなかった。現に彼はとある事情から当時一つの鉱山の権利を所有しており、けっこうな収益を上げていた。腐らせておくのも惜しいので必要な分以外は孤児院への寄付に回していたが、そのことはジルもなんとなく知っていたようだ。とはいえ未成年に親の許可も得ずにそんな大金をほいほい渡すわけにはいかないので、両親に話してから渡すと言うとジルは激しく抵抗した。母さんに知られたら巻き上げられて私が自由に使えるわけがない、というのが彼女の主張だったが、今思えば家出の軍資金にするつもりだったのだろう。

ジルは持ち前の根性でもってハトリを精神的に追い詰め、ついには十万メルクを勝ち取るにいたった。そしてその一年後に村を去ったのである。その後、風のうわさで彼女が街の医者に弟子入りして修業していると知った。そうして修業が終わると同時に彼女はウルガル村に戻ってきたらしい。今は村で小さな診療所を開きながら近隣の村への往診を行っているという。今回は偶然にもジルの往診とかち合ったから良かったものの、そうでなければ医者を探してさらに移動するはめになっていた。

「それにしても変な子だよね」

二人で食事をとっているとジルが切り出した。

「伯父さんの話を聞くだけでも相当おかしいけど、あの子、子どものくせに妙に体温が低いのよ。普通あれくらいの子って触ると熱いくらいなんだけど。それに怪我の回復も早すぎ。もう痣の色が薄れてるし腫れもひいてきてる。まあまずデゴン砂漠に転がってた時点

で生きてる方が珍しいけどね」
　ハトリもうなずいた。
「うーん、どうするかなあ。身元が分かればいいけど、たぶんこのあたりの村の子どもじゃないだろうし…」
「そりゃあ拾った人が責任もって面倒みるしかないんじゃない？」
「そんな犬猫みたいに…」
　ともかく子どもが目を覚ましたら真っ先に事情を聞かなくてはならない。それを踏まえて今後の対応を考えるしかないだろう。とりあえずジルの診療で性別は女の子だと判明したものの、それ以外はさっぱりどころか謎が深まるばかりだった。先ほど少し会話をした感じでは頭に大きな異常はなさそうだったので安心した。言葉づかいがしっかりしていたので、もしかすると良家の娘かもしれない。砂で汚れてはいたが身に着けていた衣服も上等なものだった。
　そのとき部屋の入り口からこちらを覗く小さな人影に気がついた。数時間前に寝かしつけた子どもが立って、じっとハトリの方を見つめている。これを見て慌てたのはハトリである。
「足の骨が折れてるんだから立ち上がったら駄目だろう！　ちょっと待て、そこを動くな！」
　ところが子どもはハトリの言葉を無視してこちらへ歩み寄って来る。よたよたとした足どりが危なっかしい。焦ったハトリは席を立って自分から子どもの方へ向かった。そしてちょうどよろけてこけそうになった子どもを支えることに成功した。子どもが寝ていたのは今いる部屋のすぐ隣の部屋だったが、それでも何の支えもなく歩いてきたことに驚いた。痛くなかったのかと少し呆れる。
「無茶するなよ、心臓に悪いから」
　聞いているのかいないのか、子どもは自分を支える腕をぎゅっとつかんでハトリを見上げた。あのぴかぴか光る青い眼はやはり何の表情も読み取れなかった。しかし、かといって生気が感じとれないわけでもないので、単純にあまり感情を表に出さないだけかもしれなかった。ハトリもまた子どもの顔を見つめ返していると、少した

めらうようなしぐさを見せてから子どもが口を開いた。
「父さまなの？」
ハトリは言われた言葉を理解した瞬間に固まった。脇でそれを見ていたジルがあからさまな軽蔑を込めた口調で言い放った。
「ハトリ伯父、サイテーね」

苦い思い出（後書き）

お久しぶりです。このところ私事でばたばたしておりまして、すっかり更新が遅れてしまいました。次回からは視点が切り替わる予定です。そろそろ話を進めていきたいところ。

大切なこと

再び目が覚めたとき、彼女は一人きりだった。どうしようもなく不安になった。先ほど見つけた優しい瞳、あの人はどこにいったんだろう。気づいたら体が勝手に動いていた。

布団をめくり上げると足が包帯でぐるぐる巻きにされているのが目に入った。「折れてるからな」と言われたのを思い出した。だが先ほど感じたほどの痛みはほとんど無くなったような気がする。

（行こう。あの人を探さなくちゃ）

なぜだか無性にそう思えた。

立ち上がると、やはり気になる程の痛みはなかった。そうしてぐるりと見回してみると、自分が寝かされていたのはこじんまりとした、しかし清潔に整えられた部屋だった。物はそれほど多くなく、壁が白いせいか実際より広々と感じられる。一つ気になったのは布団が床に直接敷かれていたことだ。自分の住んでいた家にはベッドがあった。誰でもそのようにして眠るのだと思っていたので、地べたに横たわっていたのには驚きだった。

「このおうちの人はベッドを買うお金がないのかしら…」

ふむむ…と考えこんだが、すぐにどうでもいいことだと思いなおして、顔を上げて茶色い扉を見つめた。この部屋には小さな窓のほかに出入口が一つしかない。ちょうど目の高さほどにある扉の取っ手をつかんで回すと、何の抵抗もなく扉が開いた。そこからひょこっと頭を入れて中をのぞきこむ。

（いた）

隣の部屋にはあの髭面の男の人と、もう一人見知らぬ女の人がいる。こうして比べてみると違いがよく分かる。あの人の気配はとても異質だ。無理やり世界に馴染ませているけれど、隠し切れていないのが彼女には分かる。しかし、それは彼女にとっては慣れ親しん

だ気配でもあった。間違いない、あの人は――。
「父さまなの？」
こけそうになった自分を支えてくれたのが嬉しくて、顔を見つめながら確かめるようにそう言った瞬間、男は固まった。髪はぼさぼさだし口元は髭で隠れていたが、それでも隙間から見える目が大きく見開かれているのが分かる。どうしたのかしら、と様子を見ていると脇から女の人が呆れたような口調で言った。
「ハトリ伯父、サイテーね」
その言葉に反応したのか男が慌てて否定した。
「ち、ちがう！　断じて違うぞ！　俺は一度たりとも子持ちになったことは…」
「なんで家族にまで隠してたのよ！　ひどいわ、私はともかく父さんにはちゃんと伝えなきゃ駄目でしょ。そりゃ私も伯父さんは典型的な結婚できない男だと思ってたけど。でも、そういえばじいさんが言ってたのを聞いたことがあるわ、『アイツも今じゃ丸くなったが昔はそりゃあすごかった』って…。嘘だと思ってたけど本当だったんだ、正直ちょっと見直したわ。少しは甲斐性があったのね」
「人の話を聞け！　というかお前はもう黙ってろ！」
なんだかよく分からないが、自分の発言のせいで父が困っているようだ。
「あの、父さま…？」
おずおずと声をかけると、男は猛然と否定した。
「俺はお前の父親じゃない！　何をどう勘違いしてそうなったんだ。もしかして顔が父親に似てるとかか？　そうだろう？」
すがるように言われて、初めて男の顔の造詣に目を向けてみた。とたんに違和感を覚える。気配は間違いなく父親と同じなのに、顔の形が全然違う。髪と髭に覆われているので分かりにくいが、それでも十分すぎるほどに異なっていた。
「父さま、お顔を変えたの？」
いぶかしむように言うと女は吹き出し、男はしばし絶句した後に

疲れ切ったように言葉を発した。
「もう訳が分からん。とにかく俺は間違いなくお前の父親じゃないから、そのことは忘れろ。その方がややこしくなくていい。そして改めてお前のことを尋ねるぞ。まず名前と年齢から」
釈然としなかったが、男が冗談を言っているようにも見えなかったので素直に答えることにした。絶対に父さまなのに、と心の中で呟いたのは内緒だ。
「ネレスティリアムノーレン、十四歳」
「十四歳！？」
今度は二人ともが驚いた。悔しいけれど、このような反応には慣れっこだ。初対面の人はたいてい彼女の年齢を聞くと驚くのだ。見た目と実年齢がちぐはぐなのは自覚しているが、そのことについて父も母もとりたてて何も言わなかったので、彼女自身あまり問題視していなかった。それでも人からこんな風に驚かれると少し傷つく。
「？だろう。どうみても七歳か八歳…」
「ほんとです」
それを聞いた男は神妙な顔をして黙りこくった。真っ黒な瞳にじいっと見つめられると、なんだか緊張してしまう。
「えっと、ネレス…なんだっけ？　ごめんね、聞きなれない響きなもんだから。もう一度教えてくれると助かるわ」
黙り込んだ男性に何かを察したのか、今度は女性の方が声をかけてきた。
「ネレスティリアムノーレン。でもみんなネルって呼びます」
彼女にとって知人と言えるだけの人間は両手で足りるほどしかいなかったが、おそらく父母以外は自分の本名を正しく覚えていないだろう。このやたらと長ったらしい名前は父が考えたらしいが、本人としてはもっと覚えやすい簡素なものにしてほしかったと思うばかりだ。
「じゃあネル。私の名前はジル・カニークよ」
よろしくねと微笑むジルの様子がとても優しげだったので、ネル

も少しだけ落ち着くことができた。
「あなたが今いるのはカブロアのサンガル村ってところなんだけど、分かる？」
　ネルは再び混乱した。自分が住んでいたのはシンラの森のはずれにあるガロンという小さな町だ。もっとも、ネルの家は町よりもむしろシンラの森に近く、ちょうど町と森の境目あたりに位置する。シンラの森はハンザ王国の西部に広がっており、緑の木々はそのまま国境地帯であるエレキア山脈へと続いている。生まれてからずっとガロアの町より遠くに行ったことのないネルは、毎日のようにエレキアの高い山々を眺めてきた。そしてそうする度にその向こう側にあるはずの、大陸最大の国であるバロッカ帝国やその他の国々を想像しては楽しんいた。
「カブロア、は名前だけなら知ってます。大陸図が家にあったから。でもなんでそんなところにいるのかは全然分かりません。だって私の家はハンザの西にあるんだもの…」
　カブロアは遥かバロッカ帝国の西に位置する小国だったはずだ。エレキア山脈を越えて、広大な帝国領土を抜けた先の地に、なぜ自分がいるのかさっぱり分からない。考えたところで答えが出るはずもなく、うつむいて黙り込んだ。すると、誰かの手が頭にぽんと乗せられた。見上げると、先ほどまで黙ってこちらを見ていた男が、安堵させるためにかうっすらとだが笑みを浮かべていた。
「ゆっくりでいいから覚えていることを全部話してみろ。そしたら一緒に考えてやれる」
　大きな手に触れられた頭がじんわりとあったかくて心地よい。彼の言葉にはなぜだかネルを安心させる力があるようだ。本人は違うと言うけれど、やはり父と同じ気配を持っているからかもしれないなと心密かに納得する。
「そうだな、まずは最後に自分の家にいた日付は分かるか？」
「帝暦四十一年第三月の十日です」
　これは自信を持って言える。朝一番に暦をめくるのは小さな頃か

ら彼女の仕事だったのだ。母は早起きが苦手な人だったので、家畜の餌やりなどの朝の仕事は自分が引き受けていた。
「今日は帝暦四十一年第三月の十四日だ」
　それを聞いたネルは思ったより日にちが経っていないことに安堵した。それを見た男は呆れたように言った。
「あのなあ、全然安心できないぞ。ハンザ王国とカブロアがどれだけ離れてるかは地図を見たんなら分かるだろう。ハンザの国境付近からでもカブロアに入るまでに最短でも七日はかかるんだ。今の時期はノロ河の流量が増加してるから、下手をすれば八日だな」
「えっ、じゃあなんで…」
「それはこちらが聞きたい。俺がお前を見つけたのはここから十キロほど離れた場所だ。それが十一日のことだから、どう考えてもおかしいのは分かるな」
「えっと、はい」
　実のところ、遠出をしたことがない彼女には十キロの距離がどれほどのものかよく分かっていなかったが、とにかくこの短期間でハンザからカブロアまで移動するのは不可能だということだけは飲み込んだ。
「見つけたとき、お前は砂漠で倒れていた。それで俺がサンガル村まで運んだんだが…その顔じゃ何が何だか分からないって感じだな」
「うーん、はい」
「伯父さん、とりあえずその辺のことは後で考えよ。何があったのか分かる範囲で教えてもらった方が早いと思うわ」
　ジルが提案した。ネルはふと、ジルがこの男性を「おじ」と呼ぶことに気がついた。
（そういえば、この人いくつなんだろう）
　ジルは二十代前半くらいに見えるが、男の方は伸ばされた髪と髭のせいで年齢不詳だ。ジルの「おじさん」なのだとしたら少なくとも四十より上だろうか。なんだか顔が隠れているせいで何歳と言われても納得できそうな不思議な雰囲気がある。よく考えたら名前す

らまだ聞いていない。先ほどジルは彼のことを「ハトリおじ」と言っていたから、彼の名前は「ハトリ」なのだろうか。そこまで考えて先ほど感じたのと似た違和感が走った。
（なんだろう、父さまの名前と違うからかしら。ううん、そんなことじゃなくて何か、噛み合わない感じ。こんな風に思うのは初めてだ）
この人は本当に「ハトリ」というのだろうか。ネルにはどうしてもそう思えなかった。根拠はないが不思議と確信があった。彼の真実の名前は別にある。そう思うと無性に彼の名前が知りたくなった。
「おじさん、名前を教えてください」
「…お前、人の話を聞いていたか？」
「お前じゃなくてネルって呼んでください。それより名前を教えて」
それを聞いた男は何か言いたそうに口を開きかけたが、結局言葉にするのはやめたようだった。そのかわり小さなため息が聞こえたが、ネルは現在の最大の関心事である彼の名前以外はどうでもよかったので、それには気付かなかった。
「俺はハトリという。これでいいか？」
また違和感が走る。なんで自分が欲しい答えをくれないのかと、ネルはじれったく思った。
「足りません。その名前はあなたを半分も表してないわ。私が知りたいのは真実あなたの名前だけ」
それを聞いて驚いたのはハトリと名乗った男ばかりではなかった。傍らのジルも眉を上げてこちらを見ていた。ジルの様子を見たハトリは気まずそうな表情を浮かべた。そしてしばらく思案した後に口を開いた。
「なぜ、俺の名前が『ハトリ』じゃないと思う？」
そう言われても言葉にしづらいのだが、ネルは一生懸命考えて答えた。
「『ハトリ』が全く嘘っていうわけじゃないけど、それじゃ違和感があるの。ネレスティリアムノーレンという名前が私だけのもので

あるように、あなたにもあなただけの大事な名前があるんじゃないのかなって感じる。どうしてそれを隠すのかなって不思議にも思う。だから私はそれが知りたいの」

最後に小さく「多分だけど」とつけ加えてしまったが、それでもネルは男の瞳を一心に見つめ続けながら言いきった。男もまたネルの視線から逃れようとはしなかった。その瞳に浮かんだ感情はとても微細で複雑すぎて彼女には理解できなかったが、それでも一瞬だけ瞳が細められたのは見逃さなかった。とても優しい表情だった。

「タカオミだ」

唐突に投げられた短い一言に、ジルは意味が分からないような怪訝な顔をしたが、ネルにはそれだけで十分だった。

だって、今度は名前が耳に届いた瞬間、すとんとネルの心の中に落ちてきたのだ。それまで妙にぼやけていた彼の輪郭が、金色の光を纏いながらするりと描かれたような、そんな感覚。彼はたしかに彼自身をネルに与えてくれた。それがとても嬉しい。

「タカオミ、あなたにぴったりの名前だと思うわ」

ネルは満面の笑みで言った。

大切なこと（後書き）

ネルは基本的にマイペースな子なので、彼女視点で書くと話がとかく脱線しがちになります。かくいう私も興味のない話は聞き流してしまうクチです。

異質

タカオミ、と呼んだときの彼の顔をネルは一生忘れないでおこうと思った。それくらい素敵な顔だった。まるで世界には自分とネルしか存在しないかのように、純粋に彼女だけを瞳に映してくれたのだ。たしかにあの時二人の間にはある種の絆が生まれたと彼女は感じた。だが、残念ながら世界に存在するのは二人だけではないということを思い出させたのは、その場でおいてけぼりになってしまったもう一人の声だった。

「え、ちょっと、全然意味がわからないんだけど。それ伯父さんの名前なの…？」

おいてけぼりの第三者ことジルである。ジルの質問に対して、タカオミはとても気まずそうな顔をした。

「ああ、うん、まあそうだな…」

「『そうだな』じゃない！　じゃあハトリって何なのよ！　まさか偽名じゃないでしょうね、二十五年間だましてたなんて言ったら承知しないから。この馬鹿おじ！」

「いや、どちらも本名なんだよ。　姪っこにそんなしょうもない？をつくわけないだろ」

「よく言う！　ほんとは『伯父』ですらないくせに――あ」

ジルはそう言うや否や、明らかに「しまった」という表情を顔に浮かべて口に手を当てた。

「おまえ、知ってたのか…」

その言葉を聞いた瞬間、ジルは固い顔をさらに強張らせた。ぽつりと小さな声で「ばか」と呟くと、そのまま部屋を飛び出していった。

その一部始終を傍らで見ていたネルは驚きのあまり微動だにできなかった。いきなりの展開に頭がついていけなかったのだ。もしかして自分はとても大変なことをしてしまったのだろうか。

「あの、タカオミって…秘密だった？」
おずおずとそう言うと、タカオミは苦笑した。
「いや、別に秘密ってわけでもないよ。ただ、もうずいぶん長いこと人に教えなかったのは確かだな。皆がハトリと呼ぶし自分でもそれが当たり前になってたから、うっかりジルにも教えそびれたというのが正しいと思う」
なぜハトリが通り名になったのかとかタカオミとジルは伯父と姪ではないのかとか、気になることはたくさんあった。それから、ほんのちょっぴりだけ、秘密を自分にだけ教えてくれたのではなかったことにがっかりした。ネルはこんな風に感じる自分に驚いた。ジルはショックを受けて走り去ってしまったというのに、自分はなんて嫌な子なのだろう。
「ごめんな、変なところ見せて。さっきのは気にしなくていいから話を戻そう」
「追いかけなくていいの？」
タカオミはちらりとだけ開け放たれた扉に視線をやった。
「ああ、今はあいつも頭に血が上っているだろうしな。後で話をしに行くから大丈夫だ」
その言葉に「これ以上は踏み込むな」というタカオミの気持ちが透けて見えた。赤の他人の自分に触れる権利がないのは分かっているが、それでも線引きされたのは少し寂しい。　それが顔に出てしまっていたのだろう、タカオミが苦笑した。
「気になるならネルにも事情はきちんと教えてやるよ。ただし後でな。今は脱線しまくった話の筋を戻すのが先。じゃないといつまでたってもお前のことが解決しないだろう」
「ほんと？」
「ああ、お前はなんだか変なやつだから特別だ」
褒められているのか貶されているのか分からない。しかし、自分にも事情を教えてくれるというのは単純に嬉しかった。
ネルが内心で喜びをかみしめている間にタカオミはもう頭を切り

替えたようだ。
「ネルが自分の家にいたのは五日前で間違いないんだな」
「あ、はい。それは絶対です」
「じゃあ何が起こって今カブロアにいるのか分かるか？」
ネルは頭をひねった。なぜ自分は物理的に不可能な距離を飛び越えてしまったのだろうか。考え込んだネルを見てタカオミが言葉を補った。
「深く考えなくていい。何があったのかだけ思いだしてみろ」
そう言われて、とにかく意識を失う直前の記憶を手繰り寄せる。長いこと黙り込んでから、やっと話し出すことができた。
「…えっと、たぶん、夢中で走ってたら体がふわってなって、それからバラバラになるみたいな感じがして…。気付いたらここにいました」
「だいぶ抽象的だな…」
「…だって、自分でも分からないんだもの」
「いや、まあいいんだがな…。じゃあなんで走ってたんだ？」
それは彼女にとってはとても嫌な記憶だ。今まで思いださなかったのが不思議なくらいだった。もしかしたら自分で思いだすのを拒んでいたのかもしれないと、心の冷静な部分で思った。
「母さまが死んだの」
その言葉にタカオミが息を飲んだのが分かったが、そのまま一息に言いきってしまおうと下を向いたまま言葉を紡ぎつづけた。
「病気だったの。私はすごく悲しくて何もできなくて、一日中眠ったりしてぼうっと過ごしてた。でもその日は朝からぞわぞわして、すごく早く目が覚めた。それで日にちを確認したら母さまが死んだ日から六日も経っていたから驚いたの。あ、もちろんお腹が空いたときにはご飯を食べたりもしてたんだけど、日にちの感覚が全然なかっただけというか…」
だんだん自分でも何を言ってるのか分からなくなってきた。よく考えたら母が死んだ日以来、こんなにたくさん人と喋ったのは初め

てだったのだと今更ながらに気がついた。その途端、涙がこぼれた。本当に、なぜこんなに悲しいことを忘れてしまっていたのだろうか。涙がとめどなく流れていく。話そうにもしゃくり上げてしまって言葉にならなかった。

「ゆっくりでいい」

タカオミはそれだけ言うと、さきほどと同じようにネルの頭に右手を置いた。そして先ほどとは違って空いている左手で背中をなでてくれた。しばらくそうしてもらって、ようやく少し落ち着いた。

「えと、それでその日はずっと嫌な予感がしてたけど、普通に過ごしてました。別にすることも無いからいつも通りぼうっとしてて…。そしたら昼くらいに突然外が騒がしくなって、窓から覗いたら知らない男の人がたくさんいたの」

それまで彼女の家に人が訪ねてくることは滅多になかった。ガロンの町には知り合いがいたが、彼らとはこちらが町に訪れた際に挨拶をする程度で、わざわざ家に来る用事などほとんどない。怪訝に思ったのはそれだけではなく、彼らの服装は明らかに町の人間とは異なっていた。

「なんだか無駄に装飾がついた服を着た人とか、鎧をつけた人もいて、訳が分からなくてすごく怖かった。だから見つかる前に裏口から逃げようと思ったんです。でも森に入ってすぐ後ろから足音がして、無我夢中で走ったら…」

「体がふわっとしてバラバラになる感じがした、と」

ネルは頷いた。

「うーん、そのあたりが決定的に意味不明だが、それを抜きにしても問題だらけだな」

腕組みをして唸るタカオミを見てネルは不安になる。自分でも事態がよく飲み込めていない上に、これからどうすればよいのか皆目見当もつかないのだ。タカオミはこんな自分を面倒くさいと思っているのではないだろうか。顔には出していないつもりだったが、彼女の不安はしっかりとタカオミにも伝わったようだった。

「そんな顔をするな。別に話を聞くだけ聞いてほっぽりだそうなんて思ってない。ただ、まあいろいろ考える時間は必要だろうな」
「…助けてくれるの？」
「『乗りかかった船』って知ってるか？」
そんな言葉は聞いたことがなかったので素直に首を横にふる。するとタカオミは少しだけ笑った。
「だろうな。さっきのは言ってみただけだが、まあつまり、一度拾ったからには最後まで面倒を見ようってことだ」

それはそうと、とタカオミが切り出した。
「ネル、腹が減ってないか？」
そう言われて唐突に空腹感を覚えた。そういえば自分は丸五日も何も食べていないのだ。一度目が覚めたときに何か飲ませてもらったような気がするが、あんなものではこれっぽっちも腹の足しにならない。どれほど悲しくとも空腹だけは我慢できず、毎日きっちり食事を採っていたネルにはあり得ない事態だ。
「とっても、すごく、ものすっごくお腹空きました」
あまりにも鬼気迫るネルの様子にタカオミは意外そうな顔をした。
「もしかして、お前けっこう食い意地が張ってる？」
「え、そんなことは――」
そう言いかけて、ふと母によく言われた言葉を思い出した。
『あなたは食べている時が一番幸せそうね』
初めて気付いたが、よもや自分は食い意地がはっているのだろうか。そういえば食事時はいつも母が少し呆れたように、しかしにこにこと笑顔を浮かべてこちらを見ていたような気がする。それはとても優しい顔だった。そこでまた別のことに気付いた。
（そういえば、母さまのことを思い出してるのに涙が出てこない）
先ほど泣いて少しはすっきりしたのだろうか。今も母の死を悼む気持ちはあるが、それでも胸が張り裂けて死んでしまいそうなほどの痛みは感じられなかった。

「食い意地、張ってるかもしれません。だからご飯いっぱい食べたいです」
少しだけ笑えたのは、多分彼のおかげだろう。
「そうか、じゃあとりあえず食事にしよう。俺も実は食べてる最中だったんだ」
そういえばネルがこの部屋に入ったとき、タカオミとジルはそろってテーブルについていた。食事の邪魔をしてしまったことを申し訳なく思った。
「粥を作ってあるからそこに座って待ってろ」
「はい」

数分後、ネルの前には白い湯気を立てるお椀が置かれていた。中にはとろりとした米の粥が盛られている。つやつやとして美味しそうだ。
「いくら腹が減ってるからって、あんまり食べ過ぎるなよ。苦しくなったらすぐ止めるように」
その言葉を聞く前にネルはスプーンをつかんで口のなかに粥をかき込んでいた。
「おいしい！」
「それは何よりだがな…。やっぱりあまり人の話を聞いてないだろう、お前」
熱さを物ともせずにスプーンを動かし続けるネルに、タカオミは少し呆れたような顔をしたが、その目は優しげだった。ネルはそれを見てぽつりと呟いた。
「なんだか母さまみたい…」
するとタカオミはげんなりした顔をした。
「父の次は母なのか…」
「あ、でもやっぱり父さまの方に似てます」
ネルは慌てて訂正した。
「あのな、さっきも聞こうと思ったが、なんで俺が父親に似てると

思ったんだ？」
　なんだ、そんなことかとネルは思ったが、質問されたからには答えなくてはならない。
「似てるっていうか、同じなの」
　タカオミはネルの言うことが分からないようだったので、言葉をつけ足した。
「気配、魂のありかた、そんな感じのものが同じなんです。正確な言い表し方は私には分からないけど、あなたと父さまは同じ。それは一目見たらすぐ分かるわ」
「いや、俺にはさっぱり分からないんだが」
「そうなの？　あなたは他の人と全然見え方が違うのに。こんなの父さま以外初めてだったから、あなたは父さまだと思った。だってそれ以外にあり得ないもの」
　ネルにしてみれば至極簡単なことなのだが、やはりタカオミは今一つ要領を得ないらしい。
「もう少し具体的に言ってくれるとありがたい…」
「それは無理です」
「せめて表現しようとする努力くらいしろよ」
「でも一つだけ気になってるのは、あなたは周りと全然違うけど、それを無理やりこの世界に馴染ませようとしてるみたいに見えること。そんなことしなくてもいいのに、なんだかもったいない気がする」
　それにはタカオミも神妙な顔をした。分かってくれたのだろうかとネルは様子をうかがっていたが、タカオミの眉間に皺が寄っているところを見ると違うようだ。
「それ、お前の父親もそうなのか？」
「うん、父さまの方がもっと自然に気配を溶け込ませてたけれど、根本は同じこと。世界から浮いてるの」
「お前、なんでそんなことが分かるんだ？」
　そう言われてネルはきょとんとした。

「分からないんですか？」
「ああ、俺が知る限りはそれが普通だと思うぞ」
「なぜ？」
心底不思議に思ってそう尋ねたのだが、タカオミは困った顔をするだけで何も言わない。もしかして自分こそが周囲とは違うのだろうか。
「今まで気づかなかったのか？」
「だってみんな感じてると思ってたから。そしたら、そんなのわざわざ口に出すことじゃないでしょう」
「それはそうだろうがなあ…。たぶんお前はけっこう特殊だ。その外見のこともそうだろ」
そのことには自覚があるだけにネルは何も言えなかった。
「お前のそれは成長が止まってるのか？」
「違います。ちゃんと成長してます。背だって去年より二センチも伸びたんだから」
失礼な、とネルは言い返したが、タカオミはやはり呆れたようにため息をついた。
「あのな、十四歳っていう実年齢はともかく、その見た目はどう見ても七、八歳だ。その年代で年に二センチっていうのはどう考えても成長が遅いぞ」
「え、う…。それはまあ、他の子より小さいなって自覚はしてますけど」
「まあ、その点に関しては俺も人のことを言えないが」
「え？」
タカオミは真剣な顔をして言った。
「ネル、お前から見て俺は何歳だ？」

異質（後書き）

相変わらず亀展開で申し訳ないです。冒頭少しネルが突っ走ってる感がありますね。まあ十四歳といえば夢見るお年頃ですから、無駄にロマンチックな表現を使ってしまうのではないかと。少なくとも私は自分のその頃を振り返るだけで悶死できる自信があります。

彼の事情

ネルは首をかしげた。
タカオミの顔は長い髪と髭によって半分近くが隠されており、綺麗なアーモンド型の黒い瞳だけが隙間から露わになっている。ぱっと見た印象では三十代から四十代だろう。ジルの「伯父」であるならばもう少し高齢になるかもしれないが、これは先ほどの件から考えてもヒントにはならない。ネルは感じた通りに答えることにした。
「四十歳くらい？」
「まあ、そんなもんだろうな。俺もそれくらいを目標にしてる」
言われた意味がよく分からない。「目標」とはなんだろうか。
「俺の実年齢は八十六だ」
「ふえ？」
ネルは固まった。
ネルが半信半疑でいるのに気がついたのだろう、タカオミが言う。
「本当に八十六だ。数え間違えてなければ、だがな。この年になると年齢なんてあまり気にしないからなあ」
「でも全然おじいさんに見えません…」
「そりゃそうだろうな」
彼は平然と言い放った。
（詐欺だわ！）
自分のことは思い切り棚に上げて、ネルはそう思った。しかし、タカオミは？をついているわけではないということもまた彼女には分かっていた。そもそもそのような？をつく理由がない。
「俺の場合は成長が止まってるんだよ。まあ俺の年なら成長というより老化の方が正しいが」
「…なんで？」
タカオミは少し考えるそぶりを見せてから口を開いた。
「ネルは『神様』ってやつを信じるか？」

今まで考えたこともなかったことを質問されてネルは戸惑った。世の中には宗教というものがあり、熱心に神の存在をあがめる人々がいるということは知識として知っている。が、それは自分自身とは何のかかわりもないものである。
極端に世間から隔離されて育った彼女は、知識のほとんどを両親と書物から学んだ。だから宗教や民話の中の神様についてなら少しは分かる。しかし、それはあくまでお話の中の存在であり、つまり彼女にとって「神様」とは想像上のものである。
「私はそういうのはよくわからないです。タカオミは信じてるの？」
「…いや、別にそういうわけじゃない」
タカオミは苦い顔をして低い声で呟いた。
「ただ、自分のことを『神様』って呼ぶやつに会ったことがあるんだ。そのときこんな体にされちまった」
ネルは話が飲み込めないまま瞬きを繰り返す。そんな彼女の様子にタカオミは苦笑した。
「いきなり言われても困るよな、こんな話。だからジルにも黙ってたんだが…。ほんとうは俺はあいつの父親の伯父なんだよ」
少しの間押し黙ってからタカオミが言った。
「無理して信じなくてもいい。俺だって奴が神だと思ってるわけじゃない」
その言葉をネルは慌てて否定した。
「タカオミの言うことは全部信じてます！　あなたが？をついてないのは分かってるから。それに私だって『変』だもの！」
「別にさっきのはそういう意味で言ったんじゃない。もし気に障ったなら悪かった、謝るよ」
「そんなこと思ってません。タカオミと一緒なら変でいいもの」
ネルは言い切った。彼女の勢いにおされ、今度はタカオミの方が呆然とした。それからふっと表情を和らげた。
「…ありがとう」
おそらくタカオミはこのことを人に打ち明けるのを厭うている。

軽い口調で話してくれたが、これまでにこの事情のせいで何か辛い思いをしたのだろうとはすぐに想像がついた。だからこそ、彼のことを信じていることだけは知っていてほしかった。

出会ったばかりの人間にこれほど肩入れするのは何故なのか、自分でも分からなった。彼女はどちらかと言えば人見知りする性質だったはずだ。それなのに、どうしてか彼のことは無性に気になるのだ。そして自分のことを好いてほしいと思った。彼に対して今まで出会った誰よりも特別な気持ちを抱いているのはたしかだ。

「でも、やっぱり不思議な話だとは思います。『こんな体』って年をとらなくなったってこと？」

「ああ。だが、それだけじゃない。ちょっと待ってろ」

そう言うと、タカオミは席を立った。

しばらくして戻ってきた彼の手にはナイフが握られていた。木の柄は使い古された深い茶色をしている。小さいがよく手入されているようだ。刃の部分が鋭く光っている。

「見てろよ」

タカオミは服の裾をまくると、それを自分の腕にぐっと押しあてた。

「や！　何するの！？」

突然のことにネルは叫んだ。傷はそれほど大きくないが、タカオミの腕からは少量ながら血が滴っている。彼は黙って流れる血の一筋を舌で舐めとった。そしてそのまま患部まで舌をはわせる。

「え？」

ネルは目を見張った。血が無くなったことで露わになるはずの患部が、どこにも見当たらなかった。皮膚は傷ひとつなくなめらかなままである。

「これが特異体質その二だ」

「どういうこと？」

「簡単にいえば、体の再生速度が尋常じゃなく速い。切り傷なら表

面部分は数秒かからずふさがる。大きい怪我ほど再生に時間がかかるが、それでも滅多なことじゃ死なないだろうな」
タカオミは大きくため息をついた。
「つまり、俺はいわゆる不老不死ってわけだ」
その表情は暗く陰っている。
「…タカオミは、不老不死が嫌なの？」
「俺はもう八十六歳だぞ。いい加減に天寿をまっとうしたい」
十四歳のネルには理解できない境地だ。年をとったら自然に死にたいと思うようになるのだろうか。
「まあ、いろいろあるんだよ」
ぽんと頭を軽くはたかれた。
（今のは「子ども扱い」だった）
彼女は彼の手から、先ほど撫でてくれたのとはまた違ったものを敏感に感じとっていた。
「ん、どうした？　なんか頬がふくれてないか？」
「別に。なんでもありません」
「そうか？」
「いいから、気にしないでください。それより、その自称『神様』ってなんなんですか」
「あ、ああ。それは俺にもよく分からん」
タカオミは頭をかいた。
「なんせあの時は死にかけてたからな…」
「死に…って」
「ちょうどその時は軍にいたんだよ。まだ帝国が成立する前だったからな、いろんなところで小競り合いが起こってたんだが、ちょっとドジ踏んでドスっとやられてな」
そう言いながら自らの腹部を撫でた。
「で、失血死寸前で意識が朦朧としてたところに男が現れたんだ。なんだかいろいろ言われた気はするが、そんな状態だったから夢か現実か自信がないな。結局、目が覚めたら傷ひとつ無い体で血だま

りの中に倒れていた」
「その男の人が『神様』？」
タカオミは頷いた。
「本人はそう言っていた。俺も信じられなかったが、自分の体の変質は嫌でも思い知らされたからな。とりあえずあいつも普通の人間じゃないのは確かだ」
「その人とはそれっきり会ってないの？」
しかし、タカオミはむっつりとした顔で俯いたまま返事をしなかった。
「もしかして、タカオミはその人のこと探してるの？」
「…まあな」
やはり仏頂面だ。その顔から、どうやら捜索が上手くいっていないことが察せられた。自分もかなり面倒な状況に立たされていると思っていたが、タカオミもいろいろと大変らしい。
「お互い苦労しますね」
真剣な顔でしみじみと言ったネルに、タカオミが吹き出した。
「なんで笑うんですか」
「いや、その外見で大人びたことを言われるとこそばゆいというか…。なんていうか妙に気が抜けるんだよ」
ときどき彼はとても失礼だと思う。しかし同時に、彼の笑顔に胸の中がじんわり温かくなるのも感じた。どうやらネルは、彼の瞳が綺麗な半月を描くのを見るのが好きらしい。
タカオミはしばらく肩をふるわしていたが、ようやくのことで顔を上げて呟いた。
「このことを話したのはネルが三人目だ…」
「そうなの？」
「一人目は俺の弟、二人目はその息子、ジルの父親だ。そう考えれば、そろそろジルにも話さなきゃいけなかったんだろうなあ…」
最後の方は誰に向けられた言葉でもなかった。

今日はもう遅いから寝るようにと言われて、ネルは再び隣の部屋で布団に入ることになった。正直あまり眠くはなかった。だが、タカオミはこれからジルのところへ話をしに行くのだろうと思ったので、おとなしく目を瞑って寝たふりをした。ネルがそうするまで彼は寝床を離れなかったのだ。彼女が眠ったのを見届けて、彼は静かに部屋を出て行った。

暗い部屋の中に一人でいると、嫌でも意識して払いのけていた不安が押し寄せてくる。

（これからどうなるんだろう）

タカオミはああ言ってくれたが、果たしてどれほど力になってくれるつもりがあるのかは分からなかった。それに彼は彼でやらなくてはいけないことがあるのだ。好意に甘えて頼りきってよいとは思えなかった。

かといって、自分一人ではどうすることもできないのも分かっていた。たとえ自宅に戻ったところで何が変わるわけでもない。母が死んで自分は一人ぼっちになった。

（父さまさえいてくれたら…）

そう思わずにはいられなかった。父は彼女が十歳のときに家を出て以来帰ってきていない。なぜ突然母と自分を置いて消えてしまったのか彼女は知らなかった。しかし、母だけは父のことを理解していたようだ。

『そのうち帰って来るわよ』

そう言って何でもない風に笑っていた。そうこうしているうちに母は帰らぬ人となってしまったのだ。父も母も自分の成長が遅いことを何も心配していなかったから、もしかすると彼女の体質について何か知っていたのかもしれない。そうだとすれば、彼女に起こったことを理解できるのは父しかいないに違いなかった。ならばまずは父を捜すのが先決だ。

とはいえ、父の行方は皆目見当がつかなかった。可能性があるとすれば、それはやはり自宅だろう。もしかしたらいつかは父が帰っ

て来るかもしれない。
考えながらも「いつか」という漠然とした言葉に背筋が冷たくなる。父が帰って来なかったら、いつまでもあの家にたった一人で住み続けるのだろうか。森に囲まれた寂しい家の中にぽつんと立つ自分を想像すると恐ろしくなった。
（それに、あの日家に来ていた男の人達のことも…）
彼らが何者なのか分からないが、あの日たしかに彼らから感じた寒気を彼女は覚えていた。ネルは自分の直感を信じている。彼らは彼女を害する人間なのだと思う。家に戻れば彼らと鉢合わせるかもしれない。だが、そうだとしても自分にできることは他に思いつかなかった。
（明日、家まで連れて行ってくれるようにお願いしてみよう）
それくらいなら何とか叶えてもらえるのではないだろうか。彼は優しい人だから。後のことは家に戻ってから考えるしかない。
不安は消えなかったが、それでもネルは必死に眠ろうと努力した。小さな窓から射す月の光が、妙にまぶしく感じられた。

彼の事情（後書き）

ちょっと一息。次の更新は一週間後くらいじゃないかと思います。

彼の事情2

窓から差し込んだ朝日のまぶしさでネルは目が覚めた。瞳に映ったのは見覚えはあるが馴染みのない黄ばんだ天井だ。自分のいる場所が自宅でないことを認識すると同時に、置かれている状況を思い出した。昨晩は悶々としていたが、いつの間にやらなんとか眠りに落ちることができたらしい。睡眠をはさんだせいか、心なしか昨日よりは幾分すっきりとしている。とはいっても睡眠不足気味には違いなく、まだ少し瞼が重い。

ネルは起き上がる前に寝そべった状態で伸びをした。それを何度か繰り返してから、名残惜しかったが彼女は布団から出た。

(床に布団をしいて眠るのってやっぱり変な感じ)

いつもなら跳ねるようにしてベッドから飛び降りるのが習慣の彼女にとっては、足を出したら床にぶつかるというのはどこか不思議なものだ。

その時ふと左の脚に巻かれた白い包帯が目についた。

「これ、何だっけ?」

部屋には誰もいなかったが、隣室からは人の気配がした。おそらくタカオミとジルだろう。そう思って部屋を出ると、そこにいたのはジル一人であった。飴色をした木箱を開けてごそごそと何かを取り出したり閉まったりしている。ネルが入ってきたのに気づくと、すぐに声をかけてくれた。

「おはよう、ネル。昨日はよく眠れた?」

「おはようございます。よく眠れました」

ネルはなるべく目を大きく開くように努力しながら答えた。ジルはくすりと笑ったがネルの?に気付いているのかいないのか、何も言わなかった。ネルはそんなジルの様子には気付かなかった。彼女には他に気になることがあったからだ。そんなネルを見てジルは言

った。
「伯父さんなら外に出てるわよ」
ジルの言葉にネルは驚いた。
「なんで分かったの…？」
「そりゃ分かるわよ。きょろきょろして、ちょっと不安そうな顔になってたもん。あのオッサンの何がいいのかは分かんないけどね、一生」
ジルはさらりとひどいことを言ったが、その笑顔を見れば彼女が伯父のことを慕っているのが伝わってくる。どうやら昨晩の話し合いは上手くいったようなので、ネルも少しばかり安心した。
「仲直りできたんだ、よかった…」
小さな声でそう呟くと、ばっちり聞こえたらしいジルは顔をくしゃりと歪めた。眉尻が下がっていて、彼女にしては珍しい表情だ。
「あー、昨日はお騒がせしてごめんね。あんまり気にしないでくれると嬉しいな」
恥ずかしそうにそう言うジルの姿はどこか可愛らしかった。背がすらりと高く、釣り目がちの茶色の瞳と高い鼻やキリリとした唇。ジルはネルのイメージする格好良い女性の姿そのものだったが、このような表情をしていると雰囲気も柔らかくなる。
「そういえば、朝ご飯食べる前にちょっと足見せてくれない？」
「足…ですか？」
「うん、昨日はうっかりしてたけど、あなたの目が覚めたらきちんと診察しなきゃと思ってたんだ。言ってなかったかもしれないけど、私は医者なの。ここもサンガル村の簡易診療所として使ってる空き家」
「お医者さんだったんですか」
「そ。とりあえずそこの椅子に座ってくれる？」
ネルは言われた通りに木で出来た椅子に腰かけた。ジルはもう一つの椅子をネルの前に運び、その上にネルの左脚を乗せた。そうしてからジルは巻かれた包帯を慣れた手つきでほどいていく。

「今どれくらい痛い？」
ネルは考え込んだ。
「…えっと、なんというか全然痛くないです」
包帯を取り去って脚を触ったり動かしたりして何かを確かめていたジルは顎に手を当てて唸った。
「うーん。やっぱり、あなたは伯父さんに負けず劣らず変わってるみたいだなあ」
治っちゃってるわ、と首を傾げて言うジルに対し、そもそも自分が怪我をしていたという自覚の薄いネルはぼんやりとしていた。
（そういえば『骨が折れてる』と言われたような気がする）
昨日タカオミと話している時点ですでに痛みが引いていたので忘れていたが、その前に目を覚ました際には確かに痛みを覚えたのだ。その後はいろいろあってそれどころではなかったのだが。
「あのね、あなたは左脚のすねを骨折してたのよ。それが昨日の時点では腫れが引いてて内出血による変色もほぼ元通り。伯父さんみたいな人もいるって知ったから、もう細かいことは気にしないことにしようとは思うけど…」
どうやらジルはネルが聞いたのと同じことをタカオミから聞かされているようだった。彼の体の異常さはネルも確かに驚いた。が、自分も同類のように言われているのは心外である。
「それって、そんなに変なんですか？」
「は？」
ネルの言葉にジルはぽかんと口を開けた。
「だって私が怪我したのって何日も前のことですよね？　それなら治ってもおかしくないんじゃ…」
「いやいやいや！　私の見立てでは全治三週間だったの、あなたの怪我は！」
今度はネルが驚く番だった。
「さ、三週間もかかるんですか？　それってすっごく体の弱ったお年寄りくらいじゃ…」

ジルは少しばかり考え込んでから、ゆっくりと確認するように言葉を発した。
「…あのさ、ネルって軽い切り傷だったらどれくらいで治る？　あ、痕が消えるまでってことだけど」
「…えっと、たぶん1日か2日くらい、かな」
そう答えるとジルはまたもや黙ってしまった。ネルは焦った。
「え、ふ、普通それくらいですよね？　」
「いや全然普通じゃないから！　あなたの常識は間違ってるから！」
力いっぱいネルの言葉を否定してから、ジルは頭を抱えてうずくまってしまった。かと思うと突然立ち上がって叫んだ。
「うー、決めたっ。やっぱあなたのことは伯父さんに一任する！とにかく怪我も治ったことだし、よかったよかった！」
考えることを放棄してしまったらしいジルは、あははと渇いた笑い声を上げた。

「それにしても遅いわね」
なかなか戻って来ないタカオミに焦れたようにジルは言った。
「朝食に使う卵をもらってくるだけなのに、なんでこんなに時間食ってんのよ。使えないジジイね」
ジルの言いようは酷いが、それも仕方ないかもしれなかった。ネルが起床してからゆうに1時間は経っているのだ。たしかに遅すぎる。ネルもだんだんとお腹が空いてきたし、何よりタカオミの顔を早く見たかった。
「外、見に行ってもいいですか？」
「それは構わないけど、ネルじゃ伯父さんがどこにいるか分かんないでしょ？　それだったら私も一緒に行くわよ」

外に出る前に、ついでだからと軽く水浴びもさせてもらった。水浴びとはいっても大きなタライに水を張っただけのものだったが、それでも数日ぶりに体を清めることができてとても気持ち良かった。

この村では、たいていの家の外に目隠し板で覆われた一角があり、そこでこのようにして水浴びをするのだそうだ。

替えの服はジルが事前に準備してくれていた。目が覚めたときに着せられていたのもネルには馴染みのない形の衣服であった。今着ているのもそれと同じで、ゆったりとした麻のシャツとズボンである。腰のところで結んでもらった帯は綺麗な赤色で、それが全体のアクセントになっていた。他にも裾の部分には鮮やかな糸で複雑な刺繍がされており、ネルはそれがとても気に入った。

服もそうだが、サンガルの村はネルにとっては全くの別世界だった。白っぽい石造りの四角い家屋の建ち並ぶ景色は、まるでおもちゃのブロックを並べたかのようだ。彼女の住んでいた町は森が近かったこともあって、ほとんどの家が木造だった。ジルにそう言うと、これは土を乾燥させて作った煉瓦を積み上げて作っているのだと教えてくれた。この地方ではほとんどの建物はそうして作られるだという。

また、多くの家に牛や馬といった家畜がいるのも物珍しかった。土が痩せたこの地では家畜はとても大事な存在なのだそうだ。ハンザとカブロアでは気候風土が全く異なるらしい。見るものすべてが新鮮で、ネルは始終きょろきょろしていた。途中でこけそうになりジルに窘められたほどだった。それからはジルと手をつないで歩いた。

連れだって歩いていると、ほどなくしてタカオミと思しき男性の後ろ姿を発見した。顔が見えずともネルにはその雰囲気からすぐに彼のことが分かった。その隣に三人の若い娘がおり、一人はタカオミの腕に自らの腕をからめている。遠目に見た雰囲気からでもタカオミが対応に困っているのが分かった。

「何やってんだか」

不機嫌そうにジルが鼻を鳴らした。そして歩み寄りながらも、いまだ少しばかり距離のあるタカオミに向かって叫んだ。

「ちょっと、いつまで待たせんのよ馬鹿伯父！　全然帰らないから迎えに来てみりゃ、何いい年してデレデレしてんのよ！」
「してねえよ！」
それまでタカオミはジルとネルの姿には気付いていなかったようだが、ジルの罵声に反射的に振り返って返事をした。
だが、ネルはその顔を見た瞬間に固まった。
「だ、れ…？」
あまりの衝撃に体が動かなかった。ネルが突然歩みを止めたために腕を引かれたジルは、ネルの顔を見て納得したようにこくこくと頷いた。
「ネルの気持ち、痛いほど分かるわ…」
ジルは同情するようにしみじみと言った。
結論だけ言えば、目の前にいたのはネルの知るタカオミとは全くの別人だった。あくまでも外見が、であるが。
娘たちに纏わりつかれながら、固まっているこちらを不思議そうに見つめているのは、２０代前半の若い男だった。それも非常に整った顔立ちをしている。綺麗なアーモンド形をした切れ長の瞳、すっと通った鼻筋、少し厚めの唇が、それぞれ完璧な形で完璧な場所に配置されている。顎がやや尖っているせいで全体としてはシャープな印象を与えるが、それでもどことなく甘い顔立ちだ。混じりけのない漆黒の瞳と髪が神秘的な雰囲気さえ醸し出している。
あまり外見の美醜に頓着しないネルであっても、思わず見惚れてしまうほどだった。しかし、一番問題なのはその彼からネルのよく知る気配を感じるということだ。
「おはよう、ネル」
ネルの顔を見た男はとりあえずという風に苦笑しながら挨拶をしてきたが、それでもネルは反応することが出来なかった。その笑顔は間違いなくネルの知るタカオミのものだったが、それを認められるほどに彼女の思考は回復していなかった。
「おい、どうしたんだ？　もしかして具合が悪いのか？　ジル、お

前は仮にも医者だろうが。病み上がりのネルを連れまわすなよ」
「あんたのせいだっての…」
低い声でジルが言うが、タカオミには何のことか分からないらしかった。それを見てジルは苛々した口調で言い放った。
「昨日まで髭面中年オヤジだったのが、いきなり若返ってたらびっくりするでしょってことよ！　察しろボケ！」
その言葉に思い出したように「あ」と呟くタカオミ。
まだ衝撃から立ち直れないネルは二人のやりとりをぼんやりと見つめていたが、その時脇から甲高い声が上がったことではっとした。
「ちょっとジル姐さんってばこんな男前どこに隠してたのよ！」
「ほんとほんと、紹介してくれなきゃ駄目よ」
「ずるーい！」
おそらくはこの村の娘なのだろう、ジルとも面識があるらしかった。
「うるさい。あんたら見た目で騙されんじゃないわよ。こんな男と関わっても碌なことないから、さっさと家に帰って仕事しなさい」
ジルが身も心も凍るような冷たい瞳でじろりと睨むと、それまでやいやい騒いでいた娘たちはぴたりと口を閉ざしてそそくさと去って行った。どうやらジルは娘たちから少なからず恐れられているようだった。
「ハトリ伯父もしっかりしなさいよ。何をあんな小娘どもにひっかかってんだか。これだからへたれは嫌なのよ」
「いや、そうは言っても、なんかすごい迫力で腕をひっぱられて何を言っても解放してくれなかったんだよ…。正直もう疲れきってて、お前たちが来てくれて助かった」
「黙れ、いい年して言い訳なんて見苦しい。ネル、もうこんなダメ親父ほっといて二人で帰りましょう。…ネル？」
ジルに声をかけられたネルは少しの間逡巡してから尋ねた。
「――ほんとにタカオミ？」
半信半疑で自分を見つめるネルに、タカオミは困った顔をした。

「そんなに違うか？　髭そって髪切っただけなんだけどな」
「…ハトリ伯父の場合は、まあ、特にショックが大きいのよ。いろいろとね」
ジルは不本意そうだ。「昨日まで浮浪者そのものだったのが素顔はこれだなんて。どこのお伽話、っていうほとんど反則…」とぶつぶつ言っている。
そんなジルをよそに、タカオミは事もなげに言った。
「そうか、驚かせて悪かったな。ジルにも洗いざらい話したし、もう年を誤魔化しても意味がなかったからさ。いい加減鬱陶しくて切りたかったんだよな、髪も髭も」
タカオミは「いやー、さっぱりした」と呑気に言った。「それに」と、タカオミはネルをひょいと抱き上げた。
「髪が短い方が、ネルの顔がよく見えるしな」
ふわりと微笑んで視線を合わせたタカオミに、ネルは自分の顔が赤くなるのを感じた。それを誤魔化すようにネルは言葉を発した。
「あ、あの、ほんとはおじさんじゃなかったんですね」
「ああ。俺が戦場に出てたのって二十代の頃なんだよ。こんなことになったのは二十三の時だから、それから見た目は変わってないな。もういかに老けてるように見せるか大変だったぞ」
「大変」と言いながらもタカオミはどこか楽しそうだった。素顔をさらせるようになったのが余程嬉しいのか、にこにこしながら「おまえ軽いなー」と言ってネルを抱いたままくるくると回っている。それを見たジルがぼそりと呟いた。
「やだ、絵になりすぎて逆に寒い…」

彼の事情２（後書き）

お久しぶりです。予告していたより大分遅くなってしまって申し訳ありません。しばらく土日の予定が詰まっていたり風邪をひいたりであまり時間がれなくて…。やっと書きたかった場面の一つを消化できました。

別れ

診療所までの道すがら、ネルたちは村人たちからいろんなものをもらった。「可愛いお嬢ちゃんだね」とか「あら、素敵なおにいさん」（こちらは女性に限る）とか、そういった類の言葉とともに手にもっていたパンやら野菜やらをくれるのだ。愛らしい少女と美青年の組み合わせというのは、どうにも人目を引くらしい。人口の少ない辺境の村ではなおさらだ。

それを傍目に見ていたジルは「この人たち働かなくても生きていけそう」と心の中で思ったが、口には出さなかった。

もともと彼女の伯父はどこか捉えどころのない変わった人物だったが、昨日の晩に明かされた彼の秘密はジルの常識を逸脱していた。彼女が子どもだった頃から伯父は村にはあまり寄りつかず、会うのはせいぜい年に一回か二回。それでも帰るたびにジルの興味をひくお土産をたっぷり用意してくれていたので、彼女は伯父のことを慕っていた。閉鎖的な村の中では伯父のように世界を広く知る人間は珍しく、そんな伯父は彼女にとって憧れの対象でもあった。もちろん口に出したことは一度たりともなかったが。

ぼさぼさの髪の毛と髭はいただけなかったが、物心がついた時からそうだったので、「伯父さんはむさい人」と認識されており、さして気にしたことはなかった。しかし、その髪と髭に隠された素顔がアレとは。

昨夜、伯父は自分の身の上をジルに語り、それでもジルが半信半疑なのを見ておもむろに席を立った。そして帰ってきたときには顔を隠していた髪と髭が無くなっていたのだ。

「ほら、年とってないだろ。信じたか？」

ハトリにそう言われたジルは思わず衝動的に彼を殴り飛ばしていた。「ぐぎゃっ」と蛙のつぶれたような声を出して吹っ飛ぶ伯父を

尻目に、彼女は自分の右のこぶしを見つめていた。
「痛い…。夢じゃないのね」
「…分かってくれて嬉しいよ」
絶対俺の方が痛いけどな、と頬をおさえジト目でこちらを見る伯父のことは無視した。
まさか伯父が自分よりも若く見える日が来ようとは思わなかった。それでも目の当たりにしたからには信じるしかない。それに騙され続けるよりは真実を告げられた方がよほど良いだろう。
それはともかくとして、現れたハトリの素顔は認めたくはないが、いわゆる「美丈夫」と言って差し支えないものであった。どことなく異国情緒が漂う品のある顔立ちはこのあたりでは見られないものだ。そもそも肌の色が違う。カブロアの内陸部の民はすべからく褐色の肌を持つが、伯父のそれは自分たちに比べると色白だ。どちらかと言えばネルの肌に近いかもしれない。顔の造作もかなり異なる。ジルは湧きあがった疑問をぶつけずにはいられなかった。
「伯父さんさ、まだ隠してることあるでしょ」
「……」
「ほんとはそもそも血縁者ってのが？じゃないの？」
ハトリは何も答えない。だが、気まずそうに切りたての髪をいじる彼を見て、ジルは確信した。
「やっぱりそうなんだ」
観念したのかハトリはぽつりと言った。
「…悪かった、騙してて」
それを聞いたジルは、全身から力が抜ける感覚を味わった。知らず知らずのうちに深いため息をつく。そうしてやっと絞り出した声は、自分で思うよりも低く響いた。
「父さんは、全部知ってるの…？」
「…ああ、ウーゴにはハルがばらしちまった。あいつが小さい時にな」
ハルというのはおそらく祖父であるヤハルの愛称だろうとジルは

思った。伯父がこんな風に祖父のことを呼ぶのは初めてだ。だが、それも当然だ。今日の今日までハトリはヤハルの息子、ウーゴの兄として振舞っていたのだから。

「伯父さんって、一体なんなの…？」

「そう言われると俺もよく分からないなあ…」

苦い笑みを浮かべて伯父は言った。

「俺もよく分からないよ」

繰り返すように呟くハトリの瞳を目にした瞬間、ジルは言葉を失った。そこにはジルが見たことも無い深い闇が渦巻いていた。悲しみとも絶望ともつかないその色を、ジルはじっと見つめることしかできなかった。こんな伯父を見るのは初めてだったからだ。伯父はいつだってひょうひょうとして、ジルがどんなにひどい言葉を投げても本気で怒ったことのない穏やかな人だった。そういう伯父だからこそ彼女も暴言を吐き続けたわけだが。

長い沈黙を打ち破ったのはハトリの方だった。

「でもな、ハルの親父に拾われて俺はあいつと兄弟みたいに育ててもらった。義父さんはすごい人でな、他人の俺のことも実の息子同然に可愛がってくれたよ。めちゃくちゃ厳しくて何度も殴られたけどな」

お前の気性は義父さん譲りかもしれないな、とハトリは笑った。彼は何かを慈しむような柔らかな表情を浮かべていた。今は亡き曾祖父や祖父のことを思い出しているのかもしれない。

「だからヤハルは俺にとって本当の弟と同じだし、その息子のウーゴは俺の甥っこだ。その娘のお前は…なんていうんだろうな、大姪でいいんだったか？　とにかく血のつながりなんて気にしたことはなかったよ」

ジルは、今まで伯父だと信じていたものが一夜にして崩れ去ったことが悲しかった。しかし、そうではなかったのだ。彼は彼でしかありえない。彼の長い人生の全てを推し量ることは自分にはできない。しかし、それでも自分に与えてくれた愛情は決して？ではなか

ったと信じられる。何と言っても、彼は十年ぶりに会った自分を一目で分かってくれたのだ。人と人とのつながりというのは、きっとそういうものなのだろう。
「あのさ、私もうお酒が飲める年になったの。だから、今度ウルガルに帰って来る時はお土産お願いね」
それを聞いたハトリはきょとんとしたが、すぐに破顔した。
「ああ、成人の祝いの分までたっぷり用意してやるよ」
次に会う時は一緒に酒を酌み交わそう。

診療所に戻ると、まずは三人で朝食をとった。ネルはすでにお腹がぺこぺこだったので、用意された食事を無言でぱくついた。香辛料が異なるのか彼女にとっては舌慣れない味だったが、なかなか美味しかった。昨日はおかゆしか食べていないので、こちらの食事がどんなものかよく分からなかったのだ。もともと好き嫌いなく何でも食べる性質だが、あまりに変わった味でなくてよかったと心底ほっとした。
食事が終わってしばらくしてから、ジルがサンガル村を出ることを告げた。
「私はサンガルの専属ってわけじゃないもの、いい加減に次の村に行かなきゃいけないからね」
ジルは近隣の村を回る往診の途中だったのだが、ネルが目覚めるのを待ってサンガルに留まってくれていたらしい。それを聞いて申し訳なくなるネルだった。
「この診療所はいつでも使ってくれていいけど、いつまでもここにいるわけじゃないんでしょ？　そもそも伯父さんはなんでデゴン砂漠にいたのよ。ウルガルに用事でもあった？」
「いや、ここからもうちょい西の村に手紙を届ける途中だったんだよ。俺も忘れかけてたが…」
「そういや一応無職じゃなかったんだっけね」
ジルは思い出したように言った。

「タカオミ、何のお仕事してるの？」
ネルが尋ねるとタカオミの代わりにジルが答えた。
「この人ね、自称「郵便屋さん」なのよ。といっても昔からほとんど働いてないも同然だったみたいだけど」
「失礼だな。別に食うに困ってないからいいんだよ」
そう言いつつ、タカオミは「働いていない」という部分は否定しなかった。
「いい年して無職の親戚がいるってのはね、身内からしたら嫌なもんなのよ」
対するジルは辛辣に言い放った。
「まあいいわ。ついでだからウルガルに寄って父さんに顔見せてってよ。最近伯父さんが全然村に戻らないって心配してたよ」
「ああ、分かった。寄らせてもらうよ。おまえにもいろいろ世話になったな」
「あ、ありがとうございました！」
ネルも慌ててお礼を述べた。
「どういたしまして。伯父さん、ネルのことよろしくね」
「ん」
ジルは二人に「じゃあね」と一言告げると、くるりと背を向けて一度も振り返らずに颯爽と歩いて行った。タカオミとネルはその背が見えなくなるまでじっと見送っていた。

別れ（後書き）

今回は短め。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2854l/

こどもどらごん

2010年10月10日20時59分発行